様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ２１５３０

研究課題名（和文）次世代が先人の知恵を継承する場面における世代間相互作用の実験的検討

研究課題名（英文）Experimental examination of intergenerational interaction in the situation where the next generation inherits the wisdom

研究代表者
田渕　恵（Tabuchi, Megumi）

中京大学・心理学部・助教

研究者番号：７０６３１９７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：【研究の目的】当該年度における研究では，退職後に地域の子育て支援を行う中・高齢女性の参加開始動機を明らかにすること，そして開始動機によって継続動機や心理発達が異なるのかを明らかにすることを目的とした。
【研究の実施】退職後に地域の子育て支援を行う女性9名を対象とし，質問紙を用いて，子育て支援の参加開始・継続動機，世代性について尋ねた。開始動機の類似性により対象者を分類したところ，受動型と能動型に分類された。能動型は「社会の役に立っている」という継続動機や，世代性の「コミュニティや次世代への貢献」が受動型よりも有意に高い結果となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究により，高齢期の次世代に対する利他性を社会の中で活かすための具体的な施策を提案できる。本研究の結果より，子育て支援を行う高齢者を一様に「次世代への貢献感が高く，世代性が高い集団」としてみなすことが，かえって活動継続を困難にさせている可能性が示された。1つのグループ内で開始・継続動機の個人差が存在するため，例えばグループのリーダーが他のメンバーの継続動機を高めようとする試みが，必ずしも全メンバーに効果を発揮していない可能性が考えられる。メンバーの開始動機をまず把握し，介入方法を開始動機によって変えることで，継続的な支援参加を促進できるかもしれない。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to investigate the retires’ motivation for beginning the child-support activities in one group and to reveal the difference of the members’ continuing motivation and generativity by their beginning motivations.
The data about beginning and continuing motivation and generativity derived from the questionnaires focused on 9 members in one child-support group (M=61.56, SD=4.16; all female). The members were classified into active or passive cluster depending on their beginning motivation. The members in active cluster had higher continuing motivation about “helping their society” and “enjoying the relationship with mothers” and had higher altruistic motivation about contribution to community and next generation (one of the aspects of generativity) than the members in passive cluster.
The individual differences about the retires’ motivation for beginning and continuing the child-support activities and generativity in one group were revealed.

研究分野：生涯発達心理学

キーワード：世代性　高齢者　利他性　子育て支援　世代間コミュニケーション

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の目的は，高齢者が次世代に対して利他的な行動をとる場面において，高齢者と次世代の間でどのような世代間相互作用が行われているのかについて検討することであった。申請者はこれまでの研究により，高齢者による利他的行動が，受け手の若者に受け入れられ感謝されれば，高齢者の世代性の発達という心理発達が促進され，次世代への利他性がさらに向上する可能性を示してきた。本研究では，高齢者の利他的行動が，次世代や社会全体にとって真に「利他的」となりうるための仕組みについて，発達心理学・社会心理学の理論を基に検討する。

２．研究の目的

本研究では，退職後に地域の子育て支援という利他的活動を行う１グループのメンバーの参加開始動機を明らかにすること，そして，開始動機によって継続動機や心理発達が異なるのかを明らかにすることを目的とした。

「他者の利益に貢献する行動」である利他行動は，心理学分野では「援助行動」や「向社会的行動」と呼ばれ(小田，2011)，先行研究では高齢者は行為の受け手，「被援助者」とみなされることが多かった(e.g. AVOLIO & BARRETT，1987; FISKE，CUDDY，GLICK & XU，2002)。しかし実際には，高齢者が他者，特に，次世代の若年者や社会に対して利他性を発揮する場面は多く認められる。高齢期に，次世代に対する利他行動が増す背景には，世代性(generativity)の発達があると考えられる。世代性とは，ERIKSON(1950，仁科訳 1977)が「次世代を確立させて導くことへの関心」と第一義的に定義し，後に「新しい存在や新しい政策物や新しい概念を生み出すこと」(ERIKSON & ERIKSON 1997，村瀬・近藤訳 2001)と拡張して再定義した概念であり，心理社会的生涯発達論の第 7 段階(壮年期)の発達課題とされている。近年の長寿化や晩婚化等の社会的背景の変化に伴い，世代性は壮年期のみならず，高齢期においても重要な発達課題となっていることが指摘されている(CHENG，2009)。

では，子育て支援に関わる全ての高齢者が，次世代への利他性や世代性の高まりによって活動を開始，あるいは継続しているのだろうか。片桐(2012)の社会参加位相モデルによれば，退職後の社会参加を促進する要因は 3 種類の志向性に区分される。社会参加によって自身が楽しみたいという「利己的志向」，人と関わりたい，人とのつながりを作りたいという「ネットワーク志向」，そして，地域や社会のために役に立ちたいという利他性，世代性を背景とする「社会貢献志向」である。そして，子育て支援等の社会貢献活動の参加者は，これら 3 種類の志向性がいずれも高いとされている。子育て支援に関わる高齢者を対象に，参加・継続動機を調べた研究(田渕，2008)でも，「自己へのメリット」「人間関係の充実感」「他者への貢献」といった，社会参加位相モデルと対応する動機が報告されているが，そこに個人差がどの程度存在するのかについての研究はない。実際に子育て支援に参加している高齢者全員が，活動の開始動機として 3 側面いずれも高いわけではなく，そこに個人差があり，その差によって継続動機も異なる可能性がある。また，参加開始動機の種類や強さによって，世代性の高低にも差が認められる可能性がある。本研究では，退職後に子育て支援を行う１グループに着目し，メンバーの参加開始動機を明らかにすること，そして開始動機によって継続動機や世代性が異なるのかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

【調査対象者および調査手続き】

地域の子育て支援を行う A グループに所属する 9 名(平均年齢 61.56±4.16 歳，全員女性，幼稚園教諭を退職)を対象とした。子育て支援 A グループは，2016 年に幼稚園教諭の退職者が中

心となって地域の子育て支援講座を開設し，2018 年に NPO 法人として登記されたグループである。活動内容は，週 5 日間の託児事業を中心に，毎月約 4 回，子育て中の親子を対象としたイベント(親子体操，リズム遊び，英語教室等)を主催している。まず，子育て支援 A グループのメンバーに，本研究の概要を説明し，質問紙を用いた調査への協力を依頼した。研究への参加が任意であることや個人情報の取り扱い等，倫理的配慮について，質問紙の表紙に記載した上で，口頭にて説明を行い，回答をもって研究参加への同意を得たものとした。質問紙を配布した 1 週間後に，9 名すべての回答を回収した。

【調査内容】

世代性；世代性を測定する尺度として，田渕ほか（2012）の Generativity 尺度 20 項目を用いた。回答は「1.全く当てはまらない」から「5.非常に当てはまる」までの，5 件法で求めた。

子育て支援活動への参加開始動機；子育て支援への参加開始動機を測定するため，田渕(2008)で抽出された「高齢者の地域子育て支援活動開始動機カテゴリー」を参考に，17 項目を設定した。田渕(2008)では，子育て支援活動に特有の「子育て支援特殊動機」として 4 カテゴリー(子どもが好き，今の子育てへの関心，親への援助，子育て経験の活用)，その他「一般的活動動機」として 8 カテゴリー(知人からの勧誘，広報，活動自体への意欲，余暇の活用等)の，合計 12 カテゴリーを抽出している。本研究ではこの 12 カテゴリーの内容を用いて 12 の質問項目を設定したほか，特に「子育て支援特殊動機」をより具体的に得点化できるよう，さらに 5 つの質問項目を設定した。

子育て支援活動の継続動機；子育て支援活動の継続動機を測定するため，田渕(2008)で抽出された「高齢者の地域子育て支援活動継続動機カテゴリー」を参考に，14 項目を設定した。田渕(2008)では，「自己へのメリット」として 4 カテゴリー(親世代の理解，子どもからの恩恵，健康維持，生きがい)，「他者への貢献」として 2 カテゴリー(親世代への貢献，家族への貢献)，「人間関係の充実感」として 3 カテゴリー(仲間との触れ合い，子どもとの触れ合い，親世代との触れ合い)，「活動自体の良さ」として 2 カテゴリー(活動自体の楽しみ，活動の負担感)の，合計 11 カテゴリーを抽出している。本研究ではこの 11 カテゴリーから 11 の質問項目を設定したほか，さらに 3 項目を設定した。

４．研究成果

子育て支援への参加開始動機の類似性によって対象者を分類するため，階層的クラスター分析(ウォード法，距離の計算はローデータによるユークリッド距離)を行った。その結果，子育て支援への参加開始動機項目「知り合いから活動への参加を誘われた」において，標準化得点が正の値(0.25)であり，その他の参加開始動機項目(「子育て中の親の助けになりたいと思った」，「自分の子育て経験を活かしたかった」，「地域に貢献したいと思った」等)では全て標準化得点が負の値となるクラスター(6名)と，反対に「知り合いから活動への参加を誘われた」において，標準化得点が負の値(-0.50)であり，その他の参加開始動機項目では標準化得点が正の値となるクラスター(3名)に分けられた。そこで，「知り合いから活動への参加を誘われた」において標準化得点が高いクラスターを「受動型」，もう一方のクラスターを「能動型」と命名した。さらに，多次元尺度法によって対象者をマッピングしたところ，水平方向の次元では「能動型」がプラスの方向，「受動型」がマイナスの方向に布置されたため，水平方向を「参加開始の能動性」とした。垂直方向の次元を調べるため，垂直方向を基準にプラスに布置された参加者と，マイナスに布置された参加者に分類し，子育て支援活動の参加開始動機を調べた。マンホイットニーの検定を行ったところ，「自分自身の健康につながると思った」において2群間で有意差が認

められ，プラス方向に布置された群の方がマイナス方向に布置された群よりも有意に得点が高かった(U = 15.50, p = .04, r = .76)。そこで，垂直方向を，自分自身にとってメリットがあるか否かが参加動機の背景となる「参加開始の利己性」とし，プラス方向に布置された群を「利己型」，マイナス方向に布置された群を「非利己型」とした。

「参加開始の能動性」(「受動型」/「能動型」)によって継続動機が異なるかを検討するため，継続動機14項目についてマンホイットニーの検定を行ったところ,「地域社会の役に立っていると感じる」(U = 1.00, p = .03, r = .77)，「子育て中の親との触れ合いが楽しい」(U = 16.00, p = .03, r = -.76)の2項目において,「能動型」の方が「受動型」よりも有意に得点が高かった。その他12項目については,「参加開始の能動性」による違いは認められなかった。「参加開始の利己性」(「利己型」/「利他型」)によって継続動機が異なるかを検討するため，継続動機14項目についてマンホイットニーの検定を行ったところ，14項目全てにおいて,「参加開始の利己性」による違いは認められなかった。また,「参加開始の能動性」(「受動型」/「能動型」)によって世代性が異なるかを検討したところ,「コミュニティや次世代への貢献」側面において,「能動型」の方が「受動型」よりも有意に得点が高い傾向が認められた(U = 16.00, p = .09, r = .59)。「参加開始の利己性」(「利己型」/「利他型」)による世代性の違いは認められなかった。

以上の結果より，子育て支援への参加開始動機には個人差があり，それによって継続動機の種類や世代性の高低が異なることが明らかとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

1)田渕恵・三浦麻子　創造的課題における高齢者と若年者の世代間相互作用の特徴. 老年社会科学. in press. (2019). 査読有

2)田渕恵・小西順子　女性退職者の地域子育て支援への参加・継続動機. 世代間交流学会誌. in press. (2019). 査読有

3)田渕恵・三浦麻子　中・高齢期の親子・夫婦における制御焦点の類似性. 心理学研究. 89(6), 632-637. (2019). 査読有

〔学会発表〕（計 2 件）

1)田渕恵・小西順子　退職後の地域子育て支援への参加・継続動機　（日本世代間交流学会第 9 回大会　兵庫　2018 年 10 月）

2)田渕恵・坂田陽子・三浦麻子　「脳の癖」は加齢と共に変化するのか？　（日本心理学会第 82 回大会　宮城　2018 年 9 月）

〔図書〕（計 1 件）

田渕恵　「第 4 章　教育・学習」,「現場の声 6」　太田信夫 (監修)　佐藤眞一 (編集)　シリーズ心理学と仕事　高齢者心理学　北大路書房　(2019) 総頁数 146.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。